



# 青少年うご

## 第22号

平成27年2月15日  
青少年育成羽後町民会議広報  
事務局：羽後町役場生活環境課  
☎62-2111内線133

伸びよう

育てよう

羽後の青少年

「つながる」

青少年育成羽後町民会議

会長 高橋 榮治

平成二十六年度も多く町の皆様の方より、ご支援をいただき有難うございました。心より感謝と御礼を申し上げます。

今年度の歩みを振り返ってみたいと思います。

青少年育成羽後町民大会を昨年十一月二十二日に開催しました。御来賓の皆様、発表者のご家族の皆様、学校関係者の皆様、育成諸関係の皆様、当会員の皆様にお越しいただきました。

今回の大会は社会を明るくする運動を展開しております、湯沢地区保護司会の皆様と共同で開催しました。社会を明るくする会は、すべての人が共に暮らせる安全・安心な社会の実現、子どもたちにかかる諸課題の解決などに取り組みまれています。こうした取り組みは、当町民会議の活動にも通じるものであります。共同して開催出来ましたことは意義深いことであると受け止めております。

大会で青少年の主張作文を発表してもらいました。小学校の低学年は、ご両親や家族の方の温かさに触れ、感謝の心が芽生えていました。身近な人の振る舞いをよく観ていることに感心しました。中学年は、周囲の人とのかかわりを大切

にしなから、こんな人になりたいという心の強さに感心させられました。高学年は、多くの人々が自分づくりと深くかわりあっていることを自覚し、新たな自分づくりを考えていることに感心しました。中学生・高校生は、これからの生き方や人格づくりに努めたいとする気持ちや伝わってきました。社会人となる心の準備が進んでいました。

次に、子ども地域活動支援についてであります。町内より十五件の応募があり、それぞれ工夫された活動内容となっております。レクリエーション、スポーツ、料理、学習教室などを組み合わせるなど、魅力あるプログラムでした。また、子ども同士、大人との交流を豊かにもつなど「楽しみ」の創造に努めておられることに感激しました。

一月九日にスケート教室を開催しました。小学生三十人、保護者十五人の参加者がありました。出発前は緊張した様子が見えましたが、終了時には「新しい友達が出来た」「楽しかった」などの感想が聞けたことを喜んでおります。学校や地域の枠を超えた交流活動ができました。

今後も、子どもたちの丈夫な体と健やかな心の育成のための支援活動に努めてまいります。町民の皆様からのお力添えをいただきながら、当会会員の皆様と力を合わせ、活動の推進にあたってまい

りますので、ご理解とご支援をよろしく願います。



「青少年育成羽後町民大会」

十一月二十二日（土）コミュニティセンターで標記大会を開催し、小学一年から高校二年までの十三人が元気に発表しました。その中の一作品を紹介いたします。（裏面）

## 【中学校の部 特選】

「思い」を受け継ぐ

高瀬中学校三年 豊島 佳紀

羽後町は、秋田県内でも有数の豪雪地帯。年が明けて冬休みが終わる頃には、右も左も高い雪の壁。どんよりとした空。なんだか心まで、どんよりしそうになります。

薄暗い峠道に続く、温かい光の帯。七曲峠の雪の壁に無数の穴が掘られ、そこにろうそくが灯されます。寒さを忘れさせてくれる、幻想的な風景。その峠を、花嫁と花婿が馬そりに揺られて進みます。約十二キロの雪道を、五時間以上かけて登る、花嫁道中。これが、私の住む地域の恒例行事「ゆきとぴあ七曲」です。

私の通う高瀬中学校は、羽後町の山間部、田代地区にあり、花嫁道中の到着地点である、旧長谷山邸のすぐ近くです。毎年、生徒の有志が、この行事に参加してきました。

私も今年、花嫁道具を引っぱる役を務めました。去年担当した先輩に、感想を尋ねると、「すげえ、疲れた！」という返事。

「俺にもできるかなあ……」  
少し不安になりました。

藁で作った蓑を着て出発を待っていると、友達のお父さんに、こんなことを言われました。

「いいなあ、おめだちは長靴履けて。おらだの頃は、わらじ履かされて、その上からスーパールの袋かぶせて歩いたもんだ。足、はっこくて、まらず大変だった。」

そんな時も、あったのか。

それにしても、こんな大きな道具、どうやって方向を変えるのでしょうか。

「先の方さ付いてる、木の棒があるべ。それを行きたい方さ、向ければいいんだ。」  
係の人は、そう言いましたが、

「そんなに簡単にできるのかなあ」

半信半疑の私。でも、その言葉通り、本当に向きが変わりました。「昔の人の知恵はすごい」と思った瞬間でした。

初めは前の人と話す元気がありました。しかし、峠に差し掛かると、次第に口数が減っていききました。肩にずしりとくる重み。息が上がります。「もうだめだ」と思った時、

「辛いと思うども、がんばれな。」

「がんばってけで、ありがどな。」

沿道の皆さんの、温かい声援。その声に後押しされて峠を登り切り、ようやく目的地の旧長谷山邸にたどり着きました。

出迎えた人々の盛大な拍手。そのほとんどは、花嫁や花婿に対するものだったでしょう。でも私は、今まで経験してきたものをはるかに超える「喜び」や「達成感」を味わっていました。

冬の夜空に打ち上がる花火、毎年見てきたものですが、その時は特別に大きく輝いて見えました。

「ゆきとぴあ七曲」は、昭和六十一年に始まった行事です。羽後町は出稼ぎが多く、残された家族にとって雪かきや雪下ろしに明け暮れる冬は、特に辛いものでした。「町に活気を取り戻したい」という、当時の町長さんの発案で、若

者が集まりアイデアを出し合って、この行事は誕生したのだそうです。

今、全国各地で少子化が進んでいます。そのため、地域に伝わる行事の継承者が減り、存続が危ぶまれています。私の通う高瀬中学校も、二年後に統合します。これから、この行事はどうなっていくのでしょうか。

「伝統行事を受け継ぐ」——それは携わってきた人々の「思い」を受け継ぐことです。

「郷土への愛」がいっぱい詰まった「ゆきとぴあ七曲」。峠に灯される明かりは、厳しい冬を乗り越えようとする人々の心を灯す、かけがえない存在です。私は、これからもこの明かりに込められた「思い」を受け継ぐ一人として、大切なふるさとを輝かせていきたいです。

## 「親子スケート教室」を実施！

一月九日に、県立スケート場を会場に子ども三十名、大人十五名参加のもとスケート教室を実施いたしました。

